

令和元年度 研究紀要

主体的・対話的で深い学びを実現する
保育の振り返りと実践のあり方
— 1年次 —



高知大学教育学部附属幼稚園

はじめに

本園は創立71年目を迎え、広い園庭に深く根を張るイチョウやクスノキの大木が、今日も子ども達を静かに見守っています。このような落ち着いた教育環境の中で、心身ともにたくましく、豊かな遊びを工夫し、自分も友達も大切に子どもを育てることを教育目標とし、教職員が力を合わせて幼児教育・保育に努めています。

教育・研究園である本園では、「よく考えて行動する子ども」をめざす子ども像とし「よく考えて行動する子どもを育む園生活のあり方」を研究課題に据えて、5年間をかけて研究に取り組み、昨年度にはその成果でもある教育課程を公開しました。それを受けて今年度は、「主体的・対話的で深い学びを実現する保育の振り返りと実践のあり方」という新たな研究課題を設定するとともに、園内研究の進め方を刷新しました。

子どもの姿を観察、記録する際に、抽象的な言葉ではなくできるだけ具体的な言葉で時系列に沿って整理することや、研究協議の際に、自分とは違う見方を大切に意見交換することを心掛けてきました。また、定期的に「幼児理解」の時間を設けて各クラスから数名の子どもの現在の姿を順に伝え合い、教員全員で園児全員の支援を行える態勢づくりを進めてきました。

このような取り組みによって、研究協議が温かい雰囲気の話し合いの場となり、教員一人一人が協議内容をより前向きに捉えることができるようになりました。また、「幼児理解」という時間をもつことで、園の子ども達全体を知ることが、一人一人の子どもをより深く理解することにつながることを実感できるようになりました。そしてそれが、日々の保育においても、各種行事においても、子ども達を信頼し様々な役割を任せてみることにもつながり、それまで気づかなかった、子ども達がもっている個性豊かな力を日々感じることで、具体的な言葉で保育を語ることで、子ども達の行動の後ろにある考えや気持ち、そして幼児期にふさわしい発達の姿もよりはっきりと見えてきました。

本書では、様々な新しい取り組みを行ってきたこの1年間の本園の保育について、成果だけではなく、課題についてもありのままに書かれています。本園における保育の課題を乗り越え、主体的・対話的で深い学びを培う保育を進めていくために、皆様からの忌憚のないご意見をいただきたいと切に願っております。

本日の公開研究発表会では「主体的・対話的で深い学びとは一実践で語ろうー」と題して、津金美智子先生（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 教授）のお話を拝聴できることに深く感謝しております。

最後になりましたが、本研究にあたり、研究保育でお世話になりました岡上直子先生、有田尚美先生、田村眞知先生、山本美和先生、教育学部の先生方をはじめ、多くの先生方のご指導、ご助言をいただきましたことに心よりお礼申し上げます。

令和2年2月

高知大学教育学部附属幼稚園
園長 玉 瀬 友 美

目 次

はじめに

I	研究の動機	1
II	研究の目的	1
III	研究の方法	1
IV	研究の経過	2
V	研究の内容	3
1	記録と週日案の取り組み	3
2	研究保育の取り組み	8
3	写真を用いた振り返りの取り組み	12
4	月別指導計画の見直し・修正（カリキュラム・マネジメント）の取り組み	23
VI	研究のまとめ	27
	・成果と課題のまとめ	
	・次年度に向けて	

I 研究の動機

平成30年度は、研究紀要「よく考えて行動する子どもを育む教育課程・指導計画」を発刊した。これは本園の目指す子ども像である“よく考えて行動する子ども”を育むための教育課程を見直す時期であり、新幼稚園教育要領をふまえた教育課程を再編成し、月別指導計画を作成したいと思ったためである。保育実践から週日案へ、週日案から月別指導計画へ、月別指導計画から教育課程へとボトムアップで作成を行った。

新幼稚園教育要領では、教育課程に基づき、全職員の協力体制の下、計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの確立が求められている。再編成した教育課程をもとに実施・評価・改善といったマネジメントを見直し、本園の保育の質の向上を図ると同時に、地域のカリキュラム・マネジメントの実施に向けた課題解決にも貢献したいと考え、保育の振り返りと実践のあり方を探ることとした。そして、昨年度まで取り組んできた週日案の見直しやドキュメンテーション作成などによる保育の振り返りをブラッシュアップさせたいと考える。

また、新幼稚園教育要領では『4（2）評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取り組みを推進する』（第1章 総則 第4）と記載されている。評価の妥当性、信頼性をあげるためには振り返り方にどのような工夫をすべきか、また評価が個人内で終わるのではなく組織的で計画的に進めるための工夫はどうあるべきかについて考えていきたい。

他にも、新幼稚園教育要領では、改訂の視点の一つとして『主体的・対話的で深い学び』を挙げている。この『主体的・対話的で深い学び』は、幼児期の教育における重要な学びとしての遊びの充実の中で実現されるものであり、本園の目指す子ども像である“よく考えて行動する子ども”につながるものであると捉えている。

そこで、作成した教育課程・月別指導計画を基に子どもと創る日々の保育が、幼児一人一人の主体的・対話的で深い学びにつながるよう、保育の『評価』にあたる振り返り方を工夫し、翌日以降の実践にどのような変化をもたらしたのかを3年間で研究することとした。

II 研究の目的

主体的・対話的で深い学びを実現する保育の振り返りと実践のあり方を明らかにする。

III 研究の方法

これまで行ってきた振り返りを見直し工夫する

本園ではこれまで『記録・週日案作成』『研究保育』『ドキュメンテーション作成』『月別指導計画の修正』において、自分の保育を振り返り、次の保育に生かすために取り組んできた。これらの振り返り方をさらに工夫し、事実を正確に捉え、幼児の内面を理解し、これまで以上に学級や学年の保育に生かすことができるようにすることとした。

以下は今年度、園内研において、振り返り方の見直し、工夫を行うこととした内容である。

1. 記録と週日案の取り組み
2. 研究保育の取り組み
3. 写真を用いた保育の振り返りの取り組み
4. 月別指導計画の見直し・修正の取り組み

上記のように行った振り返りから一定期間をおいて、その後の保育にどの程度生かされているのかを協議することで、各学級や学年における成果と課題を確認し、共有できると考えた。

IV 研究の経過

＜月ごとの研究内容＞

月	研究内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマについて ・『写真を用いた保育の振り返りの取り組み』（年長組ドキュメンテーション検討）
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ミドル保育者フォローアップ研修発展コースⅠに向けて（環境構成について等） ・ミドル保育者フォローアップ研修発展コースⅠ（年長はと組公開保育） ※ミドル保育者フォローアップ研修発展コースⅠ…高知県教育センター主催 ・「色水遊び」を通して子どもに育てたいことについて（ミドル研のラーニングストーリーを生かして） ・『写真を用いた保育の振り返り』（3歳児ドキュメンテーション）
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・『研究保育の取り組み』（年少組研究保育及び研究協議） ・『記録と週日案の取り組み』（幼児教育研究協議会2期に向けても兼ねる） ・全国幼児教育研究大会岐阜大会発表資料について
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・『研究保育の取り組み』（年長さくら組研究保育・研究協議） ・『記録と週日案の取り組み』（幼児教育研究協議会2期に向けても兼ねる）
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭環境について ・『月別指導計画の見直し・修正の取り組み』（1学期分）
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・『写真を用いた保育の振り返りの取り組み』の振り返り ・指導案の形式について ・年中組研究保育に向けて
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・『研究保育の取り組み』（年中組研究保育及び研究協議） ・『月別指導計画の見直し・修正の取り組み』（9月分）
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・『研究保育の取り組み』（年少・年中研究保育の振り返り） ・『月別指導計画の見直し・修正の取り組み』（10月分） ・「幼児教育のあゆみ」検討 ・『記録と週日案の取り組み』の振り返り ・『研究保育の取り組み』（年長さくら組研究保育・研究協議）
12月	<ul style="list-style-type: none"> ○『月別指導計画の見直し・修正の取り組み』の振り返り ○『月別指導計画の見直し・修正の取り組み』（11月分） ○研究紀要まとめの文章検討

V 研究の内容

1. 記録と週日案の取り組み

(1) 記録の工夫と実際

記録の工夫

日々の保育の振り返りと実践のあり方を見直すために、各担任が書いた記録と週日案を持ち寄り、これまでの現状やそれぞれの様式について協議した。

これまでの記録は、各担任がそれぞれ書きやすい、あるいは試してみたい様式を個別に決めて書いていた。しかし、それでは事実の拾い上げが十分でないために、子どもの内面を推し量ることが難しかったり、担任個人の考えのみを実現する環境構成で終わる傾向にあったりした。園として幼児一人一人の理解を豊かなものにしていきたいと考え、記録用紙の検討をすることとした。

そこで、まず事実の拾い上げや、事実をもとに子どもの内面を推し量ることができるよう、次の4観点を左から順に並べ、記録をとることとした。

<記録の4観点>

- 観点①：どんなことに興味をもってかかわり、どのように遊んでいるか（事実を正確に捉える）
- 観点②：どんなことに楽しさを見出しているか（根拠をあげながら推し量る）
- 観点③：どのように援助したのか
- 観点④：これからの配慮点・援助の仕方

観点①については、たくさんの場面を書くことに重点をおいてしまうと、事実の捉えが弱くなりやすく、内面の推し量りが難しくなってしまうため、教員の心に残った場面や、ねらいに即した場面にスポットを当てて記載することにした。また、子どもの姿のどの部分から内面を推し量ったのかがわかりやすいよう、あてはまる部分に下線や矢印を引くことにした。

さらに、観点③の援助については、子どものどのような経験につなげたくて援助をしたのか、詳しく書くようにした。また、自分の援助がこれからも継続すべきなのか、方向性を変えた方がよいのかなど、◎、○、△などの記号を用いて評価をするようにした。そうすることで、評価がひと目でわかりやすくなるとともに、他の教員がその子どもを見た時に有効な手立てかどうかも議論しやすくなるのではないかと考えた。

加えて、月別指導計画や教育課程の加筆修正につながりやすいものになるのではないかと考え、記録と週日案がより連動するよう、週日案に記したねらい・内容は妥当だったのか、記録の下欄に記すようにした。

<様式例>

2019年6月24日(月) ☀️ 🌧️ 🍁 年中組			
①どんなことに興味を持ってかかわり、どのように遊んでいるか	②どんなことに楽しさを見出しているか	③どのように援助したのか	④これからの配慮点・援助の仕方
<p><u>プールでの遊び</u></p> <p>A子は、水慣れしようかどうしようか困っている様子で教師の顔を見たり、手をつないでいたりしていた。教師が空いているスペースにA子を座らせようと「ここどう?」と言うがすんなり座ろうとしなかった。そこにB男が隣にどう?といったしぐさをしたらそこに座った。</p>	<p>A子はB男のやさしさがうれしかったのだろう。</p>	<p>「A子ちゃん、B男くんやさしいね」「よかったね」と言った。</p>	<p>友達の支えがありがたい。両保護者に降園時に知らせた。たくさんの良い面を保護者に知らせ、保護者同士もつながっていいな。</p>

記録の実際

協議後、修正した新たな様式で取り組んだ記録を基に、教員間で振り返りを行った。ここでは3歳児（年少組）の記録を取り上げる。

< 3歳児の記録 >

2019年6月24日(月) 年少組			
①どんなことに興味を持ってかわり、どのように遊んでいるか	②どんなことに楽しさを見出しているか	③どのように援助したのか	④これからの配慮点・援助の仕方
C子がビニールプールの近くに座り込み、アヒルの人形が入った小さいバケツに、じょうろで水を入れていた。水がバケツいっぱいになりアヒルが浮き上がると、水を流し出して、またビニールプールからじょうろで水を汲んで小さいバケツに流し入れていた。C子の表情は真剣で、浮き上がってくるアヒルをじっと見つめていた。10分くらい同じことを繰り返していたC子。側にいた教師に気付くと、 <u>※2「アヒルさんが緑の所(バケツの底から)にくっつかんが」と不思議そうに言っていた。「どうしてだろうね」という教師の言葉を聞くと、少し考えるような表情をしたが、再び同じこと繰り返し始めた。</u>	C子がその場に座り込み、真剣な表情で、アヒルが浮き上がってくる様子を見てみると、最初は、アヒルが浮き上がってくるのが面白いのかなと思っていた。しかし、C子の言葉を聞くと、なぜアヒルは沈んだままでいないのかを不思議に思い、何度も繰り返していたようである。	C子はアヒルが浮き上がってくることを「くっつかない」という自分なりの表現で表しており、そこに驚いた。 環境としては子どもの様々な気づきを生み出す物の一つとして浮くおもちゃを用意していたことがこの水とのかかわりにつながったのではないかと。 援助としては、 <u>※1C子の不思議に思っている気持ちを受けとめた。</u> それ以外の言葉は今のC子には必要がないように感じたからである。	

振り返りで出された意見

教師はC子への援助を「C子の不思議に思っている気持ちを『受けとめた』」と記載している（※1）。しかし、観点①を見ると「『どうしてだろうね』という教師の言葉を聞くと、少し考えるような表情をしたが…」とあり、C子にとっては教師の質問が難しく、ぴんと来ていなかったのではないだろうか。C子の「くっつかんが」という言葉や3歳児の発達から考えると、「くっつかんねえ」と返すことが気持ちを受けとめることにつながったのではないだろうか（※2）。

保育では教師が子どもの姿から、内面を読み取り、瞬時に判断して必要な援助をしなければならぬ。その場面の記録を基に、複数の教員で意見を出し合い、多様な見方で振り返ることで評価の妥当性、信頼性を高めることにつなげることができると考える。また教師の援助が適切かどうか、子どもの内面が読みとれる根拠が、子どもの姿に記載されている必要があることがわかった。

空欄にしておくよりも、「今日的环境を継続する」「〇〇を少しずらした位置に置く」など記載すると、振り返りにつながりやすいのではないかと。

2019年6月24日(月) 年少組			
①どんなことに興味を持ってかわり、どのように遊んでいるか	②どんなことに楽しさを見出しているか	③どのように援助したのか	④これからの配慮点・援助の仕方
C子がビニールプールの近くに座り込み、アヒルの人形が入った小さいバケツに、じょうろで水を入れていた。水がバケツいっぱいになりアヒルが浮き上がると、水を流し出して、またビニールプールからじょうろで水を汲んで小さいバケツに流し入れていた。C子の表情は真剣で、浮き上がってくるアヒルをじっと見つめていた。10分くらい同じことを繰り返していたC子。側にいた教師に気付くと、 <u>※2「アヒルさんが緑の所(バケツの底から)にくっつかんが」と不思議そうに言っていた。「どうしてだろうね」という教師の言葉を聞くと、少し考えるような表情をしたが、再び同じこと繰り返し始めた。</u>	C子がその場に座り込み、真剣な表情で、アヒルが浮き上がってくる様子を見てみると、最初は、アヒルが浮き上がってくるのが面白いのかなと思っていた。しかし、C子の言葉を聞くと、なぜアヒルは沈んだままでいないのかを不思議に思い、何度も繰り返していたようである。	C子はアヒルが浮き上がってくることを「くっつかない」という自分なりの表現で表しており、そこに驚いた。 環境としては子どもの様々な気づきを生み出す物の一つとして浮くおもちゃを用意していたことがこの水とのかかわりにつながったのではないかと。 援助としては、 <u>※1C子の不思議に思っている気持ちを受けとめた。</u> それ以外の言葉は今のC子には必要がないように感じたからである。	

※2
破線部にあるように、C子は教師の言葉に少し考えるような表情をしたが、そのまま終わっている。C子にとっては難しい質問で、困ったのではないだろうか。波線部のところで、C子が「くっつかんが」と言った言葉から「くっつかんねえ」と返すことが気持ちを受けとめることにつながったのではないかと。

※1
下線部のところで「…受けとめた」とあるが、受けとめていないのではないかと。

(2) 週日案の工夫

週日案のこれまでの様式は、担任の保育を創造する思考に沿っていなかったり、環境構成・援助が枠に収まりきらず、必要なことが書ききれなかったりといった書きづらさがあった。そのため、これまでの課題であった保育の振り返りに力を入れられるよう、週日案と記録を日々の保育に反映し、計画から振り返りまでのPDCAサイクルができるように工夫していきたいと考え、週日案の様式や書き方について見直しをすることとした。

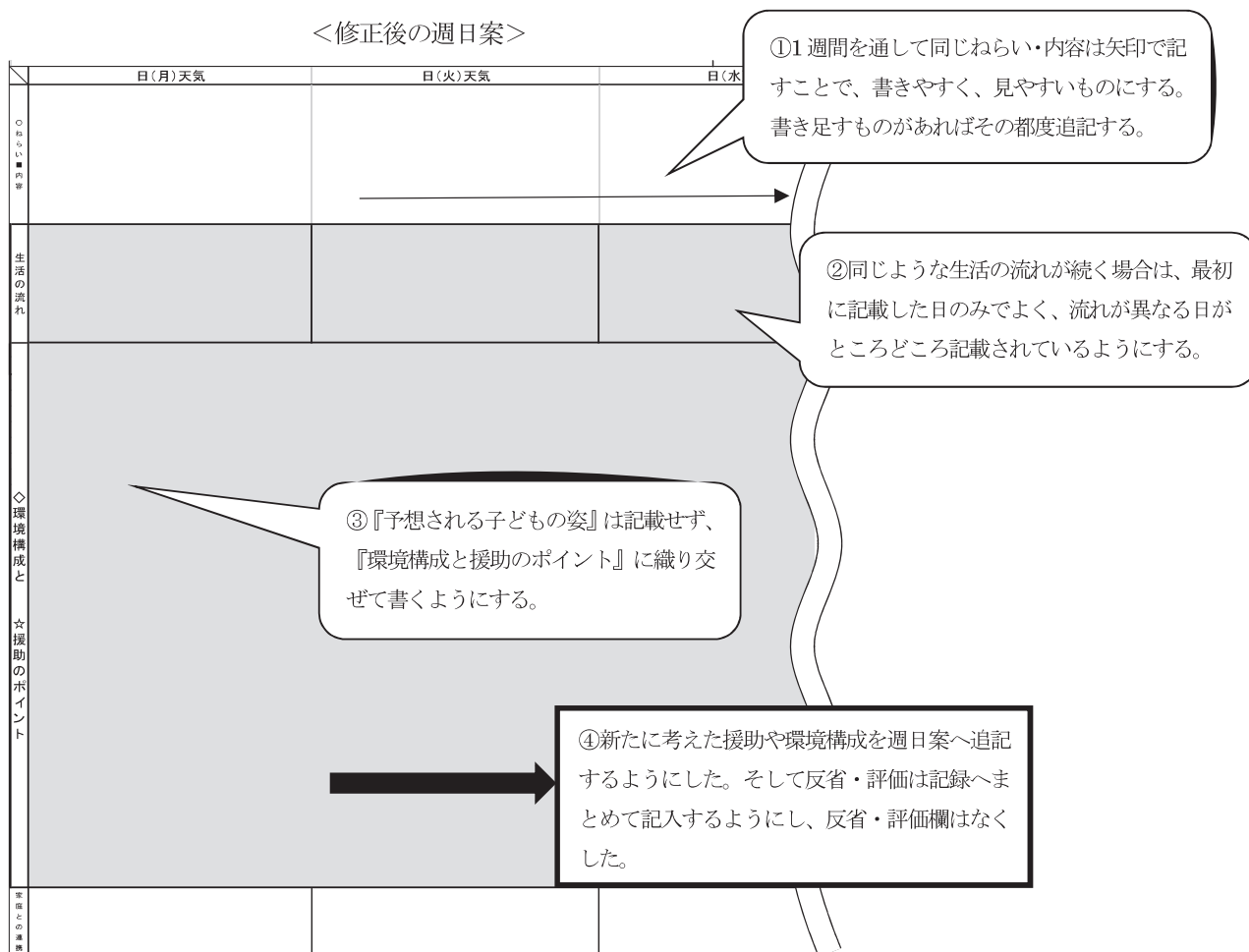
<週日案の順番を変更した項目>

まず枠組みの工夫として、『生活の流れ』を見通しながら保育者が援助や環境構成を考えられるよう、週日案の項目を右の流れにした。

1. ねらい・内容
2. 生活の流れ
3. 環境構成と援助のポイント
4. 家庭との連携

次に書き方の工夫として、ねらい・内容は一週間同じものであるならば、週終わりまで矢印を引いて記す(①)、『生活の流れ』では週始めと流れの違うところだけを書き加えていく(②)、『予想される子どもの姿』は『環境構成と援助のポイント』に溶け込ませる(③)、など重複して書いていたところをまとめ、書き入れる文字数を少なくする工夫をした。

そして、週日案と記録がより連動していくように『反省・評価』枠をなくし、一日の反省・評価は記録へまとめて記入する(④)。記録の項目④でまとめたことを、週日案の援助や環境構成に反映させることで、週日案と記録のPDCAサイクルができるようにした。



(3) 成果と課題

見直した新たな様式の記録と週日案により、保育の振り返りに取り組んだ。見直し約2か月後に教

員間で修正案の成果と課題について付箋を使って意見を出し合いながら協議を行った。

<記録・週日案の成果と課題>

	成果	課題
記録	<ul style="list-style-type: none"> ・週日案のねらい・内容に毎日立ち返るようになったため、月別指導計画の振り返りがしやすくなった。 ・週日案のねらい・内容に沿った記録をとることで、ねらい・内容に応じた評価をしやすくなった。 ・4つの視点で記録しながら振り返ることで、保育中には気づかなかった援助の不適切さに気づくことができた。 ・翌週の案が立てやすくなった。 ・事実と内面を書き分けることができるようになった。 ・身構えてしまうところはあるが、子どもの何気ない姿も成長の一コマとして見ていく力が高まったように感じる。 ・子どもたちの内面や関係性が見えてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに返って書くことが難しい。 ・記録を長々書きすぎてしまい、毎日継続することが難しい。
週日案	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全体を見て書こうとするようになった。 ・日々つながっている保育から週日案が生きて、月別指導計画に記載している内容にどう向かっていくのかが研さんされていっている。 ・『環境構成と援助のポイント』を子どもの姿を織り交ぜながら書くことで書きやすくなった。 ・教師が保育を行っていく中で新たに必要と感じた援助や環境構成も付け足して書いていくことで、自分が準備したものや援助が把握しやすくなった。 ・前週より変化した部分を赤字で記入することで、前週との違いを明確にできるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらい・内容に基づいた場面を記録するので、個人を振り返りたいときにはわかりにくい。 ・書く場面が『好きな遊び』と『一斉活動』のどちらかになりがちである。 ・週のねらいをたてるのが難しい。 ・年間計画、月別指導計画など、全体計画を俯瞰したうえで週日案に位置付けていくことが難しい。 ・担任それぞれに書きぶりが異なるので、他教員の週日案も意識的に見ることで、学びを得ていくと良い。 ・自己完結にとどまりがちになるので、教材室に両クラスの週日案を置き、いつでも他の先生が見ることができるようにする。

記録の成果としては、「週日案のねらい・内容に毎日立ち返るようになった」「ねらい・内容に応じた評価をしやすくなった」などから、これまでの課題であった週日案と記録の連動がしやすくなったことが挙げられる。課題としては、切り取る場面をねらいに応じた場面に絞ってはいるものの、まだ場面の切り取り方が不十分であったり、ねらいに立ち返ることに難しさを感じたりする部分もある。今後も継続して取り組み、教員間で必要な見直しを行っていききたい。

週日案の成果としては、様式や書き方の工夫を統一したことで、週日案が書きやすくなったことが挙げられる。また、その日の保育を記録する中で考えた翌日以降の保育で、新たに必要となった環境構成や援助を追記していくことで、自分の援助を把握しやすくなったり、前週との違いを明確にできるようになったりした。このように、担任が自らの環境構成や援助を振り返り、遊びに対する援助の流れを書き表すことができるようになっていった。

課題としては、週日案と記録の連動はできるようになったが、週日案の内容を月別指導計画へ位置付けることにはまだ難しさがある。今回は、週日案・記録の様式や書き方の見直しを行ったが、自己の記録のみで満足するのではなく、他教員の書き方・表現を参考にしたり、補助教員もすぐ見られる場所に置いたりするなど、教員間での共有を意識的に行っていききたい。また見直しは今回が全てではなく、今後も教員間で話し合う機会をもつことで、さらに保育の振り返りを充実させるものにしていきたいと考える。

<週日案様式>

高知大学教育学部附属幼稚園 先週の子どもの姿と教師の願い		平成 年度	園児 組	月 第 週	担任 担任	補助	在籍 男児 名	女児 名	計 名	園取印 手遊び: 歌: 紙芝居: 絵本: 自然:	副園取印
日(月)天気	日(火)天気	日(水)天気	日(木)天気	日(金)天気							
○外 □内											
生活の流れ											
◇環境構成と ☆援助のポイント											
※園児の成長											

2. 研究保育の取り組み

研究保育では、幼児の自然な姿が見られやすい状況をつくり、昨日、今日、明日と連続する遊びや生活の流れの中で保育を考えたいと思い、昨年度まで行っていた時差登園（研究保育の学年以外は登園を遅らせる方法）を取りやめ、教職員が前半と後半に分かれて1時間ずつ参観するようにした。

また、研究協議での学びをより深めるため、研究主任から出された園の課題と実践者の思いとをすり合わせながら、参観と協議の視点をより具体的なものにした。

（1）視点を設定するうえでの工夫

実際に出された園の課題や実践者の思い、それを受けて工夫した点は以下のとおりである。

＜園の課題・実践者の思いと視点を設定するうえで工夫した点＞

学年	園の課題・実践者の思い	視点を設定するうえで工夫した点
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ドキュメンテーションなどの話し合いを通して、子どもの姿を曖昧に捉えていることがわかったので、事実（子どもの姿）を正確に捉える力をつけたい。 対象児（遊びをなかなか見つけられずまわりの様子を見ていることが多い子どもや、目に入ったものに興味をもち、すぐに出かけていく子ども）の幼児理解をさらに深めたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 観察する対象児を3名に絞り、事実（子どもの姿）を時系列に沿って丁寧に記録する。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ねらいにある「自分の思いを伝える」ということが曖昧な捉えになっているので、4歳児ではどのような姿のことなのかを教職員で再確認したい。 2クラスの子どもの姿から4歳児全体の育ちを捉えたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの姿から、ねらいにある「自分の思いを伝える」ということを各自が考えながら記録する。 2クラスを同じ視点で見る。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの具体的な姿から育ちや経験を捉えていくことができる目を養いたい。 子どもの姿や経験していることから、今後の保育でどのような環境や援助が必要であるのかを知りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「事実（子どもの姿）」と「経験していること」「育ちつつあること」を分けて考える。 子どもの姿や経験していることを捉えたうえで、遊びごとに今後につながる具体的な環境構成や援助を出し合う。

（2）園内研の実際

4月から、ドキュメンテーションや記録について様々な話し合いを行っていくなかで、教職員が子どもの姿を大まかにしか捉えられていないということが課題として見えてきた。何をどのように使って遊んでいるか、子どもの目線や表情はどうかなど、子どもの姿をより細かいところまで正確に見ていくことが、子どもの内面理解や明日の保育へつながると考え、園の課題を教職員一人一人が自分の課題だと捉え、意識変革をしてきた。

ここでは、自分達の学びたいことへ近づけられるよう、新しい協議の進め方に挑戦した3歳児の研究協議を取り上げる。

【研究保育 6月4日 3歳児】

- ・教職員は、前半（9時から10時）と、後半（10時から11時）に分かれて参観する。
- ・3人の幼児に絞って事実（子どもの姿）を記録する。

<参観の視点>

- ① どんなことに興味や関心をもってかわり、どのように遊んでいますか。(事実を正確に捉える)
- ② どんなことに楽しさを見出していると思いますか。(根拠をあげながら推し量る)
- ③ 本日の保育のねらいに基づき、明日の保育をどのように充実させていくとよいと思いますか。(環境構成と援助の側面から)

【研究協議】

自分とは違う見方や考え方を大切に意見交換することを確認しながら研究協議を行った。

<協議の進め方とA児の例>

	協議の進め方	A児の例
1	3名の幼児について、時系列に沿って事実を書き出す。	大スコップで砂を掘る ↓ 緑のバケツへ水を入れる ↓ 掘った穴へ水を入れる *同じ場所で何度も繰り返す(10回ほど)
2	事実を根拠にしなが、どのようなことに楽しさを感じていたのかなど内面を推し量る。	・水や砂が大好き。 ・やり始めるとまわりの遊びに左右されず、集中してやる。
3	推し量った内容から、各幼児についての理解を深める。	・興味、関心があることに集中して取り組むことができる。

上記のような時系列に沿って事実を書き出す協議の進め方は、いつもの形式に当てはめて流すだけの園内研から脱却しようと、未経験の方法を取り入れたものである。3名の対象児について協議を行ったことで、“いろいろなところへ出て行く大変な子ども”と、気になる子どもとしてマイナス面が目につきやすかったが、“やりたいことに集中して取り組む子ども”“好奇心旺盛な子ども”というようにプラスに捉えられるようになった。また、3歳児の担任・保育補助員だけでなく、全教職員で対象児についての共通理解ができ、一人一人のよさを認めて保育を進めていく大切さを学んだ。



(3) 成果と課題

3歳児の研究保育同様、他学年の研究保育においても、より具体的な視点をもったり、新しい協議の進め方に挑戦したりしたこともあり、“研究協議の進め方”についての振り返りを行った。また、研究保育後どのように保育へつながっていったのかという“実践への結びつき”についての振り返りも行った。

そこで、各学年の研究保育の取り組みに対して振り返った内容を、成果と課題の2つの側面で整理する。

研究協議について

<各学年の研究保育の成果と課題>

学年	成果	課題
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・見る視点を相談して決めたことで、自分達のものとして捉え、取り組めた。 ・今回3人に絞り、事実（子どもの姿）を丁寧に記録することが求められたので、子どもの言動や表情などを見落とさず観察するよう意識できた。協議も、その記録を生かしてより深まっていった。 ・実践者だけではなく、参観者も学び手の一人として、自身の保育を振り返ったり、各時期に求められる保育などについて考えたりしながら参観する必要性を再確認した。 ・子どもが同じことを何回していたのか、視線はどこだったのかなど、細かいところまで見ていないと、幼児理解が違ったものとなることもあり、事実を正確に捉えることの大切さに気づいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児理解は深まったが、次の保育で援助や環境をどうしていくとよいのか、という話し合いまではいきにくい。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の実践者の学びたいところをどうすり合わせていくのかということを学んだ。 ・3歳の研究保育の子どもや保育を見る視点をブラッシュアップする機会となった。 ・実践者の課題（学びたいこと）が漠然としたものであると、具体的に絞ることが難しく、保育を見る視点と協議の視点が定まりにくいとわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践者に何を見てもらいたいのかということが明確にないと、視点が絞りにくい。 ・ねらいにある「自分の思いを伝える」とは4歳児ではどんな姿なのか、曖昧なままになった。 ・参観時間1時間というのは、2クラスを見るには短い。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・「育ち」を捉えたうえで、今必要な援助や環境構成について考える流れがよかった。 ・「事実（子どもの姿）」「経験していること」「育ちつつあること」を書き分けることで、クラスの育ちを捉えやすかった。 ・事前研により、担任の悩みが明らかになり、協議の視点が絞りやすかった。 ・研究保育を積み重ねてきたことで、以前より進んで発言する姿が増え、他の先生の意見を聞くことが楽しかった。 ・今回の協議で、子どもの姿や経験していることから、明日以降の保育でどのようにしていけばよりよくなるのか具体的に話し合えたことがよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事実（子どもの姿）や経験していることを付箋で書き出した後、話し合いをしながら見出しを付け、整理していくことが難しい。

その時々課題に基づいて研究保育の取り組み方を考え、形を変えながら実施できたことで、実践者にとっても参観者にとっても課題を解決していく道筋が見え、多くの学びがあった。今年度初めて行った3歳児の研究保育が、事実を正確に捉えることという視点であったので、その後の日々の記録や研究保育に生かされた。また、研究保育の取り組み後に成果と課題を洗い出していくことで、より確かに実践に結び付けていくことができた。

一方で、曖昧な見方で研究保育に取り組むと、有意義な振り返りになりにくいことも学んだので、指導案を基に事前の準備をしっかりと行い、みんなのものにしておくことも大事である。また、研究協議に参加できない職員にどのように伝えて全体のものにしていくのかも考えていきたい。

実践への結びつきについて

研究協議で学んだことを各クラス・学年で日々の実践につなげていくことが重要である。そうでなければ、研究保育をやったと満足しているにすぎない。そこで、最後の研究保育が終わった2週間後に、実践への結びつきについて振り返った。

<最後の研究保育2週間後の成果と課題>

学年	成果	課題
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが経験していることや夢中になっていることを丁寧に見るようになった。 ・一人一人のよさを意識するようになった。(マイナスをプラスに見る) ・3人の子どもを掘り下げて見ていったことで、子ども一人一人を見ていく視点に磨きがかかり、他クラスの子どもも意識して見たり、3～5歳へのつながりを考えながら子どもの姿を見たりするようになった。 ・何かを投げかけた後、最後はどうかなと気にかけるようになった。 ・保育補助員と共通理解を図りやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協議で事実を正確に捉える大切さを学んだが、日々の記録で、自分の解釈が入りがちになる。 ・遊びの中で植物を正式な名称で呼んだ方がよいと学び、正式名称で呼ぼうとしているが、植物の知識について勉強不足である。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・平板積み木での遊びを見て、3歳児との発達の違いを感じ、その年齢なりの楽しさを味わえるようにすることの大切さを感じた。 ・子どもの感情の変化を見ながら、友達同士をつなげるところを大事にするようになった。 ・子どもなりの満足感や達成感を大切にすることから、どの時間に一齐活動を入れるかなどの一日の流れも大事にするようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちを言葉では表現できずに我慢している子どもがいるので、様子に応じて教員がかかわっていくようにしているが、今後も継続していく必要がある。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが友達に対して折り合いをつける側面を知り、子どもにもそんな一面があると学んだ。 ・子どもの行為を意味づけしていくことを実践に取り入れていきたい。 ・子ども達同士で遊びを進められるようにすることが大切であり、そのための環境構成や援助を学び、意識している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの行為を言葉で返し、意味付け、価値付けるように意識しているが、「よくできたね」など評価の言葉になってしまうことがある。

研究協議の際に、自分とは違う見方や考え方を大切に意見交換してきたことで、温かい雰囲気の話し合いとなり、教員一人一人が協議内容を前向きに捉え、その後の実践に生かそうとしていることがわかる。また、いろいろな視点で研究協議に取り組んできたことが、他クラス・他学年の子ども理解の深まり、教職員の言葉がけの内容の変化などにつながっているのではないかと考えられる。今後も、その時の課題に合わせた様々な視点ややり方の研究協議を行い、より保育の実践へ結びつくようにしていきたい。そして、学んだことが継続していくよう、定期的に振り返りを行っていきたいと考えている。

3. 写真を用いた振り返りの取り組み

(1) 園内研究の工夫点（ドキュメンテーション作成を通して）

昨年度2学期から、日ごろの遊びの様子や保護者が参加していない行事などを紹介する1つの手段として、ドキュメンテーションを取り入れた。各担任が4、5枚の写真を持ち寄り、教員間で子どもの育ちについて紹介し、簡単なコメントを書いたり、「10の姿」の添付をしたりした。

今年度は前年度の取り組みを基に、以下のような取り組みを行った。

<2019年度のドキュメンテーション>

取 内 容 組 み	・保護者が保育を理解する方法だけでなく、教員の幼児理解や保育の質向上を目指す手段の1つとする。
工 夫 点	・複数枚の写真を用いて子どもの育ちや経験していることについて協議する。 ・協議時間1時間。 ・ドキュメンテーション作成後の振り返りを行う。
工 程	1. 担当学年の担任が写真複数枚を用意（写真1枚：A4半分くらいの大きさ）。 2. 担任より、その写真を選んだ背景の説明。 3. 幼児理解につながるための質疑応答を繰り返し、事実を正確に捉え、根拠を挙げながら幼児の内面を推し量る。 4. 協議後、担任は写真にエピソードを加え、保護者が理解しやすい内容になっているかなど副園長と検討する。 5. ドキュメンテーション担当と担任が写真に写っている子どもの個人名を添付し、エピソードに対応する10の姿の解説も併せて掲示する。

ドキュメンテーション作成後、これからの配慮点や援助のあり方などを振り返る。

(2) 園内研の実際

ここでは、年長組の小さい組への世話をを行った時の写真を用いた協議、2つ目に年少組の砂場遊びの写真を用いた協議について前述の工程に基づいて説明する。

【年長組の小さい組への世話 4月15日】

工程1：担当学年の担任が写真複数枚を用意



写真①：年少組ロッカー前



写真②：年中組で年中児がシール帳にシールを貼っている場面



写真③：年少組で年長児と年少児がトカゲを囲んでいる場面



写真④：年少組靴箱前で年長児が年少児に靴を履かせている場面

工程 2・3：写真の背景説明・質疑応答

年長担任が提示した写真 4 枚を選んだ理由やその時の子どもの様子などについての説明を行った。その後、教員間で幼児理解につながるための質疑応答を行い、事実を正確に捉え、根拠を挙げながら子どもの内面を推し量っていった。以下、ここでは写真①・②について抜粋したものであり、吹き出しは、工程 2、3 の協議を行った成果である。

写真①・②についての抜粋内容	教師の気づきと学び
<p>A担任：(写真②について) A男は、興味をもつと近くに寄って行くけれどあまり積極的ではない。全体の活動でも最初は様子を見ている¹。写真①にも写っているが、B男と一緒に自分から年中組に行った。担任が見守っていると、A男自ら年中児に寄って行って「ここにシール貼るんだよ」と伝えていた。</p> <p>B教諭：B男も「シール貼れているかな？」という表情。年中C男に目を配っている²。</p> <p>C教諭：目で確認しているということですね。</p> <p>D教諭：入園して何日目？</p> <p>A担任：3日目です。</p> <p>A担任：みんな年少組に行っていて、A男もついて行った。</p> <p>A担任：前日に年中組に行って「ぼくたちがお手伝いしにきます」と言いに行った。しかし、いざ当日になると、子ども達はみんな年少組に行った。A男は年少組保育室に入っても、じっとしている様子だった(写真①)。声をかけると「年中組に行ってくる」と言った³。</p> <p>D教諭：みんなが年少組に行っているのに「そうだ、年中組さんも困っているかもしれん」と思ったのだろうか。</p> <p>E教諭：もしコメントを書くとしたら「ちょっと緊張したけれど、年中組さんのシールを貼る場所を『ここだよ』と教えていました」みたいになるのかな。</p> <p>D教諭：そのままだと先生のコメントになってしまう。子どもの言葉で書くことが大事。実際ここでどういう言葉が交わされていたのか書くとリアルに伝わる。子どもの言葉もあり、先生の言葉もあり、心の声もあり、というようにしてみてもどうか⁴。</p> <p>A担任：A男は年少組に行っても終わるかなと思っていたが、自ら年中組に行ってもさらにさりげなく言葉を投げかけている。年少組ではじっとしていたが、</p>	<p>下線 2 にあるように、写真の中心人物だけでなくそれぞれの子どもの表情を見、幼児理解が深まり、写真の見方も変わった。</p> <p>下線 1、3 にあるように、写真だけでなく、担任からの説明や質疑応答もあるので、自分が気づかなかった子どもの心の動きを読み取りやすかった。</p>

進んで年中組に行き、自ら声もかけていたのでA男の成長が見られ、すごいと思った。

D教諭：先生が感動している、うわっと思ったことを何かの形で表現してはどうか。

C教諭：今言われたことを少し整えてみては。最初は年少組に行っていたが、自分で年中組に来たんですね。そこを入れて「シール貼るんだよ」とセリフも入れたらどうだろう。

工程2、3を通して

教員間で質疑応答を繰り返すことで幼児理解が深まり、他学年の子どもの育ちを身近に感じ、下線2のようにA男の育ちだけでなく、写真に写っている他の子どもにもスポットを当て、子どもの育ちを見る多角的な目や、下線4のようにドキュメンテーションを作成するにあたって大事にしたいことなどを学ぶことができたと思われる。

ドキュメンテーション作成後、これからの配慮点や援助の在り方などを振り返る

工程2、3を通して、ドキュメンテーションとして保護者に掲示した後、2学期初めに教員間で振り返りを行った。以下はその時の抜粋である。

A教諭：ドキュメンテーション作成にあたって、テーマを明確にもって作成する時もあれば、出し合いながらイメージが湧いてきて、こんなやり方でやろうかという時もある。いろいろなバージョンがあってよいと思う。ここでねらいたいものは、保護者が見て、読んで、興味を示してもらい、あるいは子どもの育ちを少し一緒に考えてもらい、私たちがやっている保育・教育に「そんな意味があるのか」と理解してもらえそうな手立ての一つになってほしいことだと思う。あまり難しく書くと読まないと思うが、だからといって吹き出しだけではわからないので、ある程度の解説が必要ではないだろうか。そのバランスが難しい。

B教諭：それぞれの子どもにとってどういう意味があるのかということを私たちに押し量って書き表すとよい。それが「10の姿」につながるようなものになることもあればよいと思う。ただ「10の姿」だけ出しても何のことかわかりにくいので、解説を加えたい。

C教諭：子どもは同じ小さい組へのお世話をしに行っているけれど、そのかわり方は違っているということと、その違いを大事にしながら、その子どもの得意な分野を生かしてかわってほしいと教員は願っているということが説明にほしい。それがないと意図的な教育は伝わらない。家へ帰って子どもの話を聞いても、ああ先生はこんなことを考えながらかわってくれている、とつなげて考えることができるようにしたい。

A教諭：幼児期の教育が直接的でないところにどんな意味があるのかといった、保護者に一番気づいてほしい部分の写真があるとよい。「そういう見方もあるのかな、先生はそういうふうに見てくれているのか」、という育ちの部分が伝わる写真を使っていきたい。

D教諭：幼小接続でいうと、園でリーダーとなっていた年長児は、小学校に入学すると一番下の学年になるので、6年生がかかわりすぎるという問題がある。年長児の育ちを小学校でゼロベースにせず、できることはさせなければならない。それと同様に年長児が新入児のお世話をしすぎている（写真④靴を履かせている場面）のであれば、年長児には考えさせるチャンスではないか。“やってあげる＝いいこと”という捉えではなく、何をやってあげるとよいのか、直接かわっていないけれど、見守る、最後までできるのかなって言うように側に立って見届けるというのも大事なことだったりする。年長担任はよかれと思って「行ってらっしゃい」と出すけれども、実際年長児が世話をしている姿を見ると、あ、やりすぎているな。「相手のことを考えて」と言いつつ、自分がやりたい気持ちが勝っているな、という部分もあるの

ではないか。

ドキュメンテーション作成後の振り返り

年長児が年少児や年中児の世話をする意図や、今後の実践につなげられる振り返りとなった。また、教員間で工程3をふまえたことで保護者への発信内容が濃くなった。毎年恒例の活動ありきではなく、どのような育ちを目指すのか3、4、5歳児の発達や学びのつながりとして考えることができた。

“小さい組の世話”についての次年度に向けての取り組み

次年度の“小さい組の世話”の取り組みをどのようにするかについて話し合った。

- ・年長児に何を学ばせたいのか担任同士で、予想される具体的な姿を通して、事前に話し合っておく必要性を確認した。また、“小さい組の世話”の取り組みを通して、『思いやりの気持ちをもって、小さい組の子どもの世話をする』ことをねらいとしているが、『小さい組の思いに合わせて』というよりも、自分がお世話したい気持ちが勝ってやっている部分もある。小さい組のお世話をするなかで年長児の思いだけではなく、相手にとってよいかどうか学ぶ経験につなげるようにしたい。
- ・年長児が一斉に小さい組の世話に出向くと、年長児が小さい組の世話を通してどのような経験をしているのかを捉えたり、小さい組にとってどうすることがよいのか考えさせたりするなどの援助ができていく。そこで次年度からは、朝の身支度担当、遊びの後の片づけ担当、弁当時のお世話など一人一役というやり方も検討し、年長児一人一人のより豊かな経験につなげるようにしたい。
- ・年長児が行っている小さい組の世話や誕生会の司会などを、次年度年長組となる年中児に引き継げるようにし、年長はこんなにやってきたという自信をもてるようにしたい。

【年少組の砂場遊び 6月4日】

次に、年少の砂場遊びの写真を基に、園内研究の際に話し合った保育の振り返り内容の抜粋を紹介する。

工程1：担当学年の担任が写真複数枚を用意



写真⑤：砂場内の水たまりに足を付けている場面



写真⑥：C男の砂遊び場面

工程2・3：写真説明・質疑応答

年少担任から写真2枚が提供され、その写真を選んだ理由やその時の子どもの様子などについて説明を行った。その後、教員間で幼児理解につながるための質疑応答を行い、事実を正確に捉え、根拠を挙げながら子どもの内面を推し量っていった。以下はその抜粋内容である。吹き出しは工程2、3を行うなかで得られた教師の気づきと学びである。

写真⑤・⑥についての抜粋内容	教師の気づきと学び
<p>A担任：教師の心が動かされた場面の写真である。暑くなってきたこの時期に大事にしたい砂と水を使った遊びで、写真⑤は教師が子どもと一緒に砂場に穴を掘って水を溜め、そこに足を浸けて遊んでいる場面。みんな足元を見ているのが不思議で、どうしてなのかみんなに考えてもらいたいと思い選んだ。写真⑥はC男が「かくれんぼ」と言いながらコップに水を汲んで、そのあと砂の上に水を流し、流した上に砂をかけていた場面である。この感性が素敵だなと思い、この写真を選んだ。</p> <p>B教諭：<u>子ども達は何を見て、何を楽しんでいるのか¹。</u></p> <p>A担任：子ども達は足元を見て、ゆっくり足を動かしていた。足を動かすことで砂混じり水の感覚、感触が楽しいのではないだろうか。</p> <p>B教諭：<u>楽しんでいるところは三者三様（写真⑤の女兒3名）なのか²。</u></p> <p>A担任：汚れることなど気にせず、いろいろな遊びをてらいなくしてみようとする子ども達なので、楽しんでいるところは同じであると思っている。3人とも表情も「わー」ではなく、じっくり味わっているように見えるので。</p> <p>D教諭：<u>泥水で足が見えたり、消えたりするところが不思議なのではないか³。</u>家の風呂では水は透明であることが多い。足が無くなったのが、“わあ出てきた”と不思議がっているのではないかな？</p> <p>A担任：そうかもしれないが、自分としては足の感触を確かめているような気がする。</p> <p>B教諭：足の感触を確かめていると思う理由は？感触だけであれば、足元を見なくても上を向いていても味わえる。</p> <p>A担任：「わあー」という大きな喜びの表情ではなく、小さく「わあ」と言う小さな喜びの表情だったので…。そっと足を動かしているところからもそう思った。</p> <p>B教諭：だとすると『そっと足を動かす』『目が下を向いている』がポイントなのか？</p> <p>A担任：見えないんだけど思わず見て、感触と感覚を楽しんでいる。「どうなっているんだろう」とは思っていないだろうけど、気づきではないか。</p> <p>B教諭：この写真だと感触と感覚を楽しんでいるのかどうか、判断することは難しい。足元が見えていない。踏むと色が変わる、水の変化を見て楽しんでいるのか。決め手を写真では決められない。子どもの内面を推し量る写真を撮るのは難しい。解釈はしたいが事実をどれくらい集めているかで、解釈できるか否かが決まる。よくわからないところが多いと、『私の思うこの子像』になる。同じ場で同じ遊びをしていますが学びは違う。楽しんでいるところが、みんな同じでしたといった時点で、大雑把にしか見ていない。普段のその子どもをどう理解しているのかがないと、内面は理解できない。</p>	<p>下線1、3にあるように、他教諭により、いろいろな角度からの質問や解釈が投げかけられているが、A教諭は『砂混じりの水の感覚、感触が楽しい』という自分の解釈は変えていない。しかし『砂混じりの水の感覚、感触が楽しい』と言える根拠の部分は想像であり、曖昧になっている。</p> <p>下線2にあるように、3人の女兒の楽しさの違いについても、担任教師は『同じではないか』と捉えていたが、その根拠については曖昧であった。</p>

工程2、3を通して

子ども達の目線の先がはっきり撮影されておらず、幼児の気持ちを理解しにくいのが、担任がその時に子どもの事実や楽しさを正確に捉えていたのかがこの協議により問われた。

ドキュメンテーション作成後、これからの配慮点や援助のあり方などを振り返る

工程2、3を通して、ドキュメンテーションとして保護者に掲示した後、2学期初めに教員間で振り返りを行った。以下はその時の抜粋である。

- ・写真⑤の協議を通して、担任が自分の幼児理解にとらわれ、見方が固定化していることがわかった。また、根拠となる事実を正確に捉えることの大切さが明らかとなった。
- ・どの姿を捉えて子どもの内面を理解したのか、楽しさはどこにあるのかがわかっていないと、ねらいにつながる保育となっていないことも、学びとなった。
- ・幼児理解が正確でないと、幼児期にふさわしい生活を送ることができるようになるための環境構成や援助を明らかにすることができない。テーマを探っていくためにも幼児の内面を理解する力量を高めていく必要がある。

実践への結びつきについて

年少の砂遊びのドキュメンテーションを通して以下のような意見があった。

- ・砂場で遊んでいる子どもの楽しんでいるところを一周りにしていたが、一人一人の楽しんでいることの違いに目を向けるようになった。
- ・根拠となる姿を正確に捉えようとする姿勢を学んだ。

(3) 全体を通しての成果と課題

成果

写真を用いた幼児理解は、写真や映像を活用して1時間以内で行った。短い時間で保育を共有し協議を行うためには有効な手段であった。

○各学年が取り組んだドキュメンテーションからの学び

今年度は、年長→年中→年少と順番にドキュメンテーションを作成した。その中で得られた学びを吹き出しで示している。



年中 5月13日(月)

担任が、前庭の落ち葉掃きをしていると「ぼくもやるー」とAくんとBくんがやってきました。

3人が熊手を使って落ち葉をかき集め、山のような時、Bくんが「落ち葉で山つくろう」とつぶやきました。担任は「いいねー。そうしよう」と言い、Aくんは黙々と落ち葉をかき集めました。3人で、前庭を掃き進めていると、Aくんが上を見上げ「あー、この木からこんなに…」とつぶやきました。そう言われ

て見上げると、クスノキの葉がずっと上の方で風に揺れていました。

Aくんは、自分で落ち葉をかき集めていたからこそ、クスノキの大きさと茂った葉に心を動かされたのではないかと思いました。

こうした子ども達が心動かされる体験を積み重ねられる保育をしていきたいと思います。

春のクスノキの葉を集める遊びがきっかけとなり、年中前庭の環境がより豊かになった。熊手やタライ等道具が充実し、環境を再構成することができた。



年中 5月13日(月)

AくんとBくんは、手洗い場の近くにある地面の穴を見ていました。2人はそれぞれ、「穴の中に虫がいる」と、草や枯れ葉で穴をつつき、生き物が出てこないか見ているようでした。そこへ、Aくんがバケツに水を汲んで持ってきて、穴の中にザーッと流しました。

すると、穴からはブクブクッと泡が出てきました。それを見たAくんはうれしそうに笑い、その様子を見ていたBくんもにこにこしています。そばにいた保育者にも、「ブクブクって言った!」「やっぱりね」と自分達が感じたことをうれしそうに伝えます。

その後、何度も穴に水を流し、次はまた泡が出てくるだろうか、次はどんな反応をするのだろうか、と期待しながら遊んでいました。偶然のできごとをきっかけに、遊びの中の発見や驚きを共有し、うれしい気持ちを味わった一場面でした。

今度はどんな遊びで友達と心を響かせ合うのでしょうか、楽しみです。

子どもがどういう思いでその行動をしたのか、どこを楽しんでいるのか、子どもの姿から考えようとするようになった。

年少 6月4日

砂① 蒸し暑い一日。入園して日も浅い今の時期、砂場で水をたっぷり使って開放感を味わいながら遊ぶことで「あ～楽しかった」という満足感を味わい、明日も「幼稚園で遊びたいな」といった意欲にもつながるように、先生は砂遊びに誘ってみました。

先生と一緒に掘った穴に、容器に汲んだ水を流し入れたり、水が溜まった所に足を浸けたりして、思い思いに砂と水に触れて遊んでいます。よく見ると、どの子も足元を見ながら、何度もゆっくり足を動かしたりしています。砂に流した水の動きや変化に不思議さを感じたり、溜まった水に足を浸けて感触を楽しんだり、この時期ならではの開放感を味わう遊びを体験できました。



砂② Aくんが「かくれんぼ…」とつぶやきながら銀色のコップに水を汲んでいました。次の行動は、と見ていると、砂場にしゃがみこんで、カップの水をそっと砂の上に流したかと思うと、今度は水がしみ込んだ砂の上に、両手で砂をかぶせていました。“かくれんぼ”のイメージと、砂の中に水を隠す遊びとが重なって『なるほどな』と思いました。



なんてすてきな感性と表現でしょう。

水や砂の性質に気づき、それを生かして遊ぶまでは、まだまだのもも組ですが、砂や水に触れて遊ぶおもしろさのその先は、きっとさらに楽しい遊びになっていくことでしょう。

個々の姿や場面の切り取り方が大切である。

○その他の学び

- ・時間が経って思い出すと事実と違う部分もできやすいため、動画も活用するようになった。
- ・協議を通して他学年の子どもの発達について理解が深まった。

- ・ドキュメンテーションが媒介となって保護者と教師の話題になるようになった。
- ・ドキュメンテーションをきっかけに、親子の会話を聞くようになった。
- ・職員間で質問し合うことで、様々な角度（視点）から子どもを理解することができた。

課題

- ・子どもの顔を撮影することが大事なのではなく、その写真で何を伝えたいのか、わかるようにクローズアップされていることが大事なため、ドキュメンテーションの写真の撮り方、場面の選び方を工夫する必要がある。
- ・子どもの目線や動きなど、写真のどこを見て、どのような様子から内面を推し量るのか根拠を上げながら捉えることが難しい。
- ・遊びのつながりは今のままでよいのか、プラスする環境は何かなど常に考えていくことが必要である。
- ・1枚の写真で伝えたい内容をわかりやすい言葉にすることが難しい。
- ・テーマである「主体的・対話的」に時々立ち返り、テーマに迫る題材を選ぶようにしたい。
- ・ドキュメンテーションがおたより等につながっていくとよい。
- ・子どもの姿が生き生きと伝わる説明文が書けるよう、より磨きをかけていきたい。
- ・来年度もテーマに向けて、幼児を理解する力量が上がり、協議が深まるように、写真や映像などを活用できたらと考える。

参考：3学年のドキュメンテーション

年長 4月15日 進級3日目（年長の手伝い初日）



今年も年長児の手伝いが始まりました。年中や年少のクラスへ出かけて行って、わからないことや困っていることがあれば手伝ったり、一緒に遊んだりしています。

Aちゃんは、もも組（年少組）に登園してきたBちゃんの様子を探るように、「カバン掛ける所、わかる？」と声をかけました。CちゃんやDちゃんは、その後ろにぴったりと寄り添って、Eくんは少し離れてその様子を見守っていました。Bちゃんはというと、たくさんの

年長さんに驚いたのか、あまり反応はありませんでした。

朝の手伝いは、年長児にとっても、どうしてあげたらいいかと緊張する場面です。勇気を出して声をかけても、喜んでくれると思ってしても、思った通りの反応が返ってこないことがあります。でも、こうした思いを巡らせて自分なりに行動してみる経験は、この時期にたくさんしてもらいたいことの1つです。失敗を恐れず、その子なりに考えて、行動してほしいと思っています。



もも組さんの朝の様子を見ていたE君ですが、もも組さんにもうすでにたくさんの年長児が見に行っていたからか、自分も年中の5月から途中入園で戸惑ったことを思い出したからか、自ら「うさぎ組を見てくる」と言ってF君と一緒にうさぎ組へ行きました。

そこでは「ここに貼るよ」とうさぎ組のG君に優しく教えている姿がありました。

また、F君はH君がシールを貼れているのか確認をしていました。

一人一人が何をすればよいのか自分で考えて、朝の準備の手伝いをしている姿が見られて、とてもうれしく思いました。

年長 6月5日（水）

友達と一緒にツマグロヒョウモンの幼虫を探していたAちゃん。もも組のテラスで幼虫を見つけると「ここにもおるでー」と友達に知らせました。教師が「Aちゃんも探ってみる」と言うと、「探りたいけど、こわい…」と言って手を出そうとしません。「大丈夫だよ」と言っても触りませんでした。

その時、BくんとCくんは「大丈夫で」と言い、Dくんは「ふわふわしちゅうき、触ってみいや」とAちゃんを励ましました。すると、Aちゃんはおそろおそろ手を伸ばし、ついに幼虫を捕まえることができました。「触れたやん」と言いながら、みんなで喜びました。

幼虫に興味はもっていたけれど、こわくて触れなかったAちゃん。一緒に探していた友達の存在・応援があったので、勇気を出して捕まえることができたのだと思います。

友達のできるようになったことを一緒に喜べる友達もすてきなと思いました。





年中 6月26日(水)

毎日のように園庭で鬼ごっこを楽しんでいた子ども達。梅雨に入り、園庭での鬼ごっこが難しくなったので「遊戯室で“ケイドロ”をしようか」と提案してみました。すると、子ども達は「やったー」「やるやる」と意気込んで帽子をかぶり始めたり、水筒を下げたりして遊戯室に向かいました。

「先生、一緒に捕まえよう」と教師と手をつないで泥棒役の友達を追いかけることを楽しんだり、捕まって牢屋にいる友達を警察に見つからないように助けるスリルを楽しんだり、楽しみ方はそれぞれです。中には、ベンチに腰かけて、まずはじっくり友達の動きを見ている子もいます。

ケイドロが終盤にさしかかった頃、泥棒役からか、Aちゃんが写真のように帽子のゴムひもを鼻の下にあてて、うれしそうに「先生、泥棒!」と言いました。教師も「わあ、ほんとに泥棒みたいだね」と言いながら、かぶっていた帽子のゴムひもを鼻の下にあてました。それを見ていたBちゃんも同じようにゴムひもを鼻の下にあてて「みんな泥棒!」と言い、3人で笑い合いました。まわりにいた子ども達も次々と帽子のゴムひもを鼻の下にあてて互いの顔を見合って大笑い。

Aちゃんが泥棒のイメージを帽子で表現したことがケイドロをさらに“楽しい”“面白い”ものにしていきました。次々真似て同じようにしたり、「泥棒」と言い合ったりして共振していきました。こうした友達と同じことをしたり、言ったりする楽しさから充実感や満足感を味わい、“仲間っていいな”、“楽しいな”、といった気持ちをたくさん感じてほしいと思います。



年中 7月5日(金)

AくんとBくんは、砂場で裸足になって遊んだことをきっかけに、最近では砂場だけではなく、園庭の様々なところへ裸足で出かけて、走っていくようになりました。

この日2人は、うさぎ組のCくんと、園庭で裸足になって集まっていた。

立ち止まって地面を見たり、そうかと思えば思いっきり走り出したりしている様子。

近づいてみると「先生、ここふわふわしちゅうで」とAくん。何かというと、昨日の雨で園庭の土がいつもより柔らかくなっていたのを発見していました。地面がふわふわしていることを発見したBくんはその感触を楽しむように思いきり走ります。

「先生も靴脱いできいや」と、遊びの仲間にも誘ってくれました。

築山近くを歩いていても「先生、ここは痛いきね」と、知っていることを教えてくれます。一緒に裸足になって歩いてみると、確かに大きな石が多くて、痛いのです。

ただ広い所を思いきり走ったり、お友達と一緒に過ごしたりすることを楽しんでいると思っていたのに、その中で園庭の様々な地面の感覚を繰り返し感じて、自分の中に経験として積み重ねていっているのに驚きました。

年少 9月18日 新幹線ごっこ

子ども達は初めて見る積み木に興味津々で、思い思いに積み木を重ねては、様々な見立てを楽しんでいました。

Aくんは積み木を1列に並べ新幹線を作りました。先頭部分は三角柱の積み木で、その次は運転席、乗車席と続いているようでした。Aくんは手をハンドルを持つ形にして運転をし、Bちゃんがお客さんとなり、楽しんでいました。教師も仲間に寄せてもらい、アナウンスに志願して、「トゥルルル…まもなく、新幹線が…」と言ったところで、「Aくん、どこに行くんやっただけ」と聞くと、「東京」と言う返事。すると急に運転席を降りて「新幹線は東京にしか行かんがで」と教師に言いに来ました。「わかった。まもなく新幹線が東京に出発します」と言うと、今度はBちゃんが「ちょっと待って」と新幹線から急いで降りて三角柱の積み木を持って来て座席の背もたれにしました。無事出発したかと思うと、今度は運転手のAくんが車両の先頭部分（三角柱の積み木）を持って前に倒れ込むようにし、「爆発」と言いながら、車両から数回切り離していました。再び運転を始めるとBちゃんがAくんに「大丈夫だった？」と尋ね、Aくんも「うん！」と答えました。（本当によかった）



その後、CちゃんやDちゃんが乗車したり、Eくんが店主のFちゃんの車内販売があったり、新幹線の後ろにはGちゃんが他の車両を走らせていたり、様々に遊ぶ姿が見られました。

3才児の自由な発想に驚かされっぱなしだった新幹線ごっこ。年長組になると『本物らしく、こだわって』遊ぶようになりますが、3才児ならではの自由な発想や表現を、この時期に心ゆくまで楽しんでほしいなと思います。

4. 月別指導計画の見直し・修正（カリキュラム・マネジメント）の取り組み

（1）月別指導計画の見直し・修正における工夫

昨年度までは、本園の目指す子ども像『よく考えて行動する子ども』や新幼稚園教育要領の『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』をもとに教育課程の再編成及び月別指導計画の見直しを行った。

今年度は、各月の指導計画に「こんな子どもを育てたい」という教師の願いをより明確にし、そのための環境構成や援助が具体的にイメージできるように、教員全員で月別指導計画の振り返りを行い、見直し・修正を図っていくこととした。

以下が見直し・修正を図った観点と方法である。

見直し・修正の観点

【予想される子どもの姿】

- ・週日案や記録をふまえ、子どもの経験していることがより具体的にイメージできる内容にする。

【ねらい・内容について】

- ・「この月によく見られる子どもの姿」の記載内容と、ねらい・内容との関連性を確認しつつ、週日案や記録に記載している子どもの姿から、各時期に何を育てたいかを再確認しながらより具体的に書く。

【環境構成について】

- ・教師も環境の一部ではあるが、子どもとかかわって行ったことは援助として整理し直し、環境構成と援助が混在しているものは、文章を分けて記載する。
- ・ねらい・内容を実現するために必要な環境構成をどのように行ったのか、本年度の取り組みから、次年度につなげていきたいものを加筆する。

【援助のポイントについて】

- ・なぜ、何のためにその援助をするのかといった教師の願いや意図、根拠を示す。
- ・曖昧な表現で書かれているために、教師の動きが具体的にイメージできないものはないか再点検し、誰が担任になっても実践と結びつきやすいよう、具体的に書く。
- ・ねらい・内容を実現するために必要な援助をどのように行ったのか、本年度の取り組みから、次年度につなげていきたいものを加筆する。

【全体を通して】

- ・本園の保育を豊かにしている自然環境を通して、子ども達に何を育てたいのかより明確に記載する。
- ・3歳、4歳、5歳の発達の連続性をふまえて記載する。

見直し・修正の手順

- ① 月末に学年会で週日案・記録を基に月別指導計画の修正を行い提出し、副園長と内容確認を行う。
- ② 翌月上旬の園内研で修正した月別指導計画を持ち寄り、協議する。各学年5分で修正点を説明し、それを基に10分程度協議を行う。全体で1時間を目安に終了できるように進行する。
- ③ 協議後、各学年で修正作業を行い、関連する写真を添付する。
- ④ 最終案を回覧し、修正内容の確認を行う。

（2）園内研の実際

4月より、前ページに示した観点をもとに、月ごとに月別指導計画の見直しと修正を行った。具体的な見直し・修正例を、3歳児10月の指導計画で示す。

【見直し・修正例】 3年保育 3歳児 10月指導計画（※赤字は加筆・修正した文）

この月によく見られる子どもの姿	ねらい (○)・内容 (■)
<p>体を動かして遊ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会の経験のない子どもが多く、年中や年長組の運動会ごっこを見たりすることで、運動会のイメージをもつようになる。 ・ 教師が誘う運動会ごっこに喜んで参加する。先生やまわりの友達と走ることが楽しく、何番でも「1番やった」と喜ぶ。 ・ 1番になれなくてしょげたり、「負けた」と悔し泣きをしたりする子どももいる。 ・ 仲よしの友達と一緒にスタートしたり、手を繋いで走ったりしたい。 ・ 好きなものや憧れているものになりきって、体を動かすことが楽しい。 ・ 他のクラスの競技や踊りにも興味をもって、横でじっと見ていたり、真似と一緒に踊ったりする。 ・ 広い園庭に行くと、思わず走り出したくなったり、好きな場所へ行ってみたいとなったりする。 ・ 広い園庭で運動会ごっこをした後、総合遊具で遊ぶことを喜ぶ。(今年忍者の修行のイメージで遊ぶ) 築山の坂(草やコンクリートの面)をいろいろな上がり方、降り方を試してみることが楽しい。 <p>・ 運動会ごっこで不安なことや苦手なことがあると、「やりたくない」「ここで見ている」と教師に伝えてくる。</p> <p>・ ダンスは張り切って踊る子どももいれば、恥ずかしがって踊らない子どももいる。</p> <p>友達と一緒に自分の思いを表して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達と「○○ごっこ」など、同じイメージのもとに遊ぶことが多くなり、同じことをしたり、言ったりすることが楽しい。また、自分の思いを表現することで満足し、相手に伝わっているかどうかはあまり気にとめていない。 ・ 好きな遊びが似ている子ども同士が少しずつグループになり始め、一緒に過ごす友達がだいたい決まってくる。 ・ 3歳児なりに仲間意識が芽生え始め、遊びに仲間入りするときは、「よせて」という言葉を進んで使うようになったり、「よせて」と言わないと仲間に入れないという姿や、“お面がないと入れない”などと仲間入りに条件をつける姿も見られる。 ・ 友達と遊ぶことが楽しくてたまらないが、それぞれが自分の思い通りになることを望んでいる。そのため、言い合いをしたり、どちらかが泣いたり、我慢したりといったいざこざも多くなる。 ・ 友達と一緒に過ごすことが楽しくなってきたり、おしゃべりが楽しくなり、会話が増えてきて、クラスがにぎやかになってくる。 <p>秋の自然に触れて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年長の前庭に三輪車で出かけたときにクスノキの実を拾ったり、前庭のイヌマキの実を拾ったりすることを喜び、袋に集める。 <p>・ 教師に手伝ってもらって団子を作ることが楽しい。</p>	<p>ねらい (○)・内容 (■)</p> <p>○好きな遊びの中で、体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 友達や先生と一緒に、走ったり投げたり、引っ張ったり、跳んだりするなど、いろいろな動きを楽しむ。 ■ 楽しそうなものに誘われたり、先生や友達の真似をしたりして、いろいろな動きを楽しむ。 ■ 巧技台などで作った場で、渡ったり、跳び移ったり、ジャンプしたり、投げたりする。 ■ 先生や友達と一緒に、音楽ののって踊ることを楽しむ。 <p>■ 運動会ごっこのなかで、他の学年を応援したり、応援されて体を動かしたりすることを楽しむ。</p> <p>○友達と一緒に自分の思いを表して遊ぶ楽しさを味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ごっこ遊びなどで、友達と同じ動きをしたり、同じことを言ったりして遊ぶ。 ■ 友達と同じイメージのなかで遊び、思ったことを表してみる。 <p>○秋の自然に触れて遊ぶ楽しさを味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ いろいろな木の実を拾ったり、集めたりする。 ■ 拾った木の実を砂や土の料理に入れたり、飾ったりして遊ぶ。 ■ 先生と一緒に団子を作って遊ぶ。 <p>見直し・修正の観点 (全体を通して)</p> <p>『3歳、4歳、5歳の発達の連続性を踏まえて記載する』</p> <p>土団子を作る遊びは、全学年通して経験させたい遊びであるが、3歳には記載がなかったので、全ての項目に加筆した。</p>

見直し・修正の観点 (子どもの姿)

『週日案や記録をふまえ、子どもの経験していることがより具体的にイメージできる内容にする』

週日案や記録を振り返ると、クスノキやイヌマキの実を見つけては、喜んで拾ったり、集めてビニール袋に入れたりする姿が見られていた。また、教師も秋の自然に触れて遊ぶ経験を大事に考えてかかわっていた。そこで、子どもの姿を具体的にイメージできるように加筆した。

見直し・修正の観点 (ねらい・内容)

『週日案や記録に記載している子どもの姿から、各時期に何を育てたいかを具体的に書く』

週日案や記録に書かれている子どもの姿から、週日案の中でもねらいとして挙げていたこともあり、秋の自然に関する“ねらい・内容”を加筆した。

見直し・修正の観点（援助のポイント）

『なぜ、何のためにその援助をするのかといった教師の願いや意図、根拠を示す』

『・友達や年中児や年長児が頑張っている姿を応援したり、自分の番が来るまで待ったりする経験も大切にしていく。』には、何を育てたいのか教師の願いや意図が含まれていない。「応援」の意図を運動会ごっこにおける子どもの姿から振り返り、何を育てたいのか教師の願いや意図が伝わるように加筆・修正を行った。

また、『応援』し合うことが運動遊びの意欲にもつながっているため、内容項目に付け加えるべきこととした。加筆内容は前ページの「■運動会ごっこのなかで、他の学年を応援したり、応援されて体を動かしたりすることを楽しむ。」である。

環境構成	援助のポイント
<p>体を動かして遊ぶことを楽しむために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスみんなで意図的に綱引きや玉入れをしたりするなど、子ども達が興味をもって遊びに入っていけるようにする。 ・綱引きで引っ張る人数のバランスなどは、子どもに任せると危ないので、教師が必ず中に入り、人数の調整などをする。 ・楽しい曲に合わせて、踊ることを楽しむことができるように、子ども達が日ごろから好きな曲や思わず体を動かしたくなるような曲を用意し、楽しい雰囲気をつくりながら一緒に踊る。 ・子ども達は、空想と現実の間を行き来している時期でもあるので、教師が子どもの興味が湧いてくるようなキャラクターを用具に付けたり、お面や飾りなどを作ったりして、運動会への意欲が高まっていくようにする。 <p>友達と一緒に自分の思いを表して遊ぶために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇ごっこ」など、少しずつ同じイメージをもって遊ぶことが多くなる。そこで、友達と一緒に遊ぶ楽しさが味わえるように、子ども達のもっているごっこ遊びのイメージがふくらむような場をつくったり、道具を用意したりする。 	<p>体を動かして遊ぶことを楽しむために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体を動かして遊ぶ楽しさが味わえるように、子ども達がゴールにいる好きな先生を目指して走るようにする。また、教師が「待って待って」などと言いながら一緒に走ったり、まわり子ども達と一緒に、走っている子ども達を応援したりする。 ・体を動かすことに、興味が向かなかったり、自信がなかったりする子どももいるので、その子どもの走る速さに合わせて追いかけたり、手を貸しながら巧技台やビームで遊んでみたりして、体を動かす楽しさを知らせていく。 ・巧技台や総合遊具などで遊ぶなかで、子ども達からいろいろな身体を動かすアイデアが生まれれば、認めたり、まわりに広げたりする。 ・運動会の競技の内容は、それまで楽しんできた体を動かす遊びが楽しく、無理なくできるように、物の配置や順番を工夫したりするなど、構成を考える。 ・友達や年中児や年長児が頑張っている姿を応援したり、自分の番がくるまで待ったりする経験も大切にしていく。 ・運動会ごっこを通して、他学年や友達と応援し合うなかで、応援したり、されたりすることの喜びを感じ取れるように、「応援してもらって力が出たね」などと言葉にしていく。 <p>友達と一緒に自分の思いを表して遊ぶために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごっこ遊びなど、子ども達だけでイメージをふくらませて遊んでいるとき、子ども達の楽しんでいるところ（なりきるのが楽しい、同じ言葉を言うのが楽しいなど）を探るようにする。それに応じて、教師がお客さんになったり、必要なものを用意したりして、子どもが友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるようにする。 ・いざこざが起きた時には教師が仲立ちになって、どうしたらよいか子ども達と一緒に考えたり、子どもの様子によっては別の遊びに誘ったりしていく。
<p>秋の自然に触れて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平たい木箱にひもを付けた物を用意し、園庭で見つけた自然物を拾って入れたり、入れた物を引っ張ったり、三輪車に取り付けて運んだり、イメージをふくらませて自然物とかかわることができるようにする。 ・<u>団子を入れて並べる箱（もろぶたや弁当箱など）を用意し、パーティーやお店屋さんにつなげることで、まわりの友達と団子作りの楽しさが共有できるようにする。</u> 	<p>秋の自然に触れて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イヌマキやピラカンサの実を集めて料理に使えるようにしておいたり、「木の実やさんですよ」と集めておいた木の実を売ったりするなどし、木の実の楽しさに気づき、遊びに使う楽しさを味わえるようにする。 ・クスノキの実やドングリがたくさん落ちている場所に出かけていき、心ゆくまで木の実を拾う楽しさが味わえるようにする。 ・子どもを団子作りに誘って、元の形は教師が作って渡すことで作りやすくし、「ぎゅっ、ぎゅっ」声を掛けながら一緒に作ることで、お団子を作る楽しさが味わえるようにする。

見直し・修正の観点（環境構成・援助のポイント）

『ねらい・内容を実現するために必要な環境構成・援助をどのように行ったのか加筆する』

『曖昧な表現で書かれているところは、実践と結びつきやすいよう具体的に書く』（援助のポイント）

加筆した“ねらい”“内容”を受けて、環境構成と援助を加筆した。ここでも週日案や記録に基づいて検討を重ね、来年度以降の保育の参考となるように、援助の具体的な動きをイメージできる表現で加筆した。

(3) 成果と課題

以上のように、本年度の週日案と保育記録から月別指導計画の見直し・修正を行うことで、活動ありきではなく教師の意図がどこにあるのか、何を育てたいのかについて考え、次の月別指導計画の見直し・修正に臨んできた。その中で各教師が感じた成果と課題は以下のとおりである。

成果

- ・月別指導計画→週日案作成→記録→月別指導計画修正というP D C Aサイクルができ、園全体で取り組みやすくなった。
- ・本園で大事にしたい遊びを、発達の連続性をふまえてより考えるようになった。
- ・定期的な意見交換を行うことにより、各教員がどのような思いで保育をしているのかがわかった。
- ・保育補助員の学習会を行い、長期の指導計画についてよりよい共通理解を図ることができた。
- ・園内研の場だけでなく、教員の普段の会話に、長期の指導計画とのつながりを意識した保育についての発言が聞かれるようになった。
- ・幼児の具体的な様子を思い浮かべながら加筆することで、月別指導計画の修正が楽しくなった。
- ・当該年度、当該学年のみではなく、次年度への保育の構想、他学年の保育とのつながりに対する意見も聞かれるようになった。

課題

- ・幼児の姿や行事の様子などをどの程度具体的に書くとよいのか、共通の判断基準を作っていく必要がある。

月別指導計画の見直し・修正を行うことにより、月別指導計画から週日案を作成し、記録を取り、また月別指導計画を修正するというP D C Aサイクルができ、保育の振り返りがしやすくなった。また、月別指導計画の修正を通して、子ども達が繰り返し楽しんでいる土団子作りや色水作りなど、本園で大事にしたい遊びについて、発達の連続性をふまえながらより考えていくようになった。そして、月1回の定期的な意見交換を行うことで、各教師がどのような思いをもって保育をしているのかがよりわかるようになり、普段の会話の中にも、長期の計画を意識した保育のあり方についての発言が聞かれるようになったことも成果と言える。

しかし、週日案や記録をふまえ、子どもの経験していることがより具体的にわかる内容となるようにしていくために、どこまで具体的に書けばよいのかに迷いがあるなど、教師間で共通の判断基準を作っていく必要があることがわかった。

VI 研究のまとめと今後に向けて

園内研で保育の振り返り方を見直し、工夫したことで、翌日以降の保育実践にどのような変化をもたらしたのか、まず、その成果について考えたい。

『記録と週日案の取り組み』では、記録において、子どもの姿（事実）と内面を書き分け、自分の援助を振り返り、明日への援助の具体を明らかにし、週日案に記載することで、子どもの内面をより丁寧に推し量ろうとしたり、ねらい・内容に立ち返った評価がしやすくなったりした。また、教員同士、多様な見方で記録を振り返ることで、評価の妥当性、信頼性を高めることにつながるということがわかった。

『研究保育の取り組み』では、園の課題と実践者の思いをすり合わせ、それに応じて参観や協議の視点を工夫し取り組んだ。結果、子どもの見方がプラスに変わったり、子どもが同じことを何回していたのか、目線はどこだったのかなど、細かいところまで見ていないと、幼児理解が違ったものとなることがわかり、子どもの姿を最後まで見たりするようになった。また、いろいろな視点で研究協議に取り組んできたことが、他クラス・他学年の子ども理解の深まり、教職員の言葉がけの内容の変化などにつながっている。

『写真を用いた保育の振り返りの取り組み（ドキュメンテーション）』では、担任が提案した写真をもとに、子どもの楽しさがどこにあるのか、根拠となる姿は何かなどについて協議を行った。どの姿を捉えて子どもの内面を理解したのか、楽しさはどこにあるのかがわかっていないと、ねらいにつながる保育とならないことから、子どもの姿を丁寧に見るようになった。

『月別指導計画の見直し・修正（カリキュラムマネジメント）』では、作成した記録や週日案をもとに、その月に育てたい子どもの姿が具体的に浮かび上がってくること、本園の自然環境をより生かした計画にすること、環境構成と援助を細やかにしていくこと、発達の連続性をより意識することなどを目的に取り組んだ。自分の記録や週日案をもとに月別指導計画を修正し、園内研で協議するなかで、クラス子ども達はどのようなところが育っていて、どのようなところを丁寧に捉えてかわかっていくべきなのか、自分の保育を振り返る機会となった。そして3学年の育ちを見通し、今の時期の経験がどうつながるのか、今このような育ちになっているためにはどのような経験を積んでおくべきかといったことをより意識できるようになった。

以上4つの園内研の取り組みを工夫し、取り組み内容をブラッシュアップさせたことで、カリキュラム・マネジメントをより意識し、保育の計画→実践→評価→改善をしやすくなったことも成果である。記録により子どもの内面を丁寧に読み取り、援助を振り返り、ねらい・内容に立ち返り、週日案に生かし、実践を行い、月別指導計画を修正していく、ときに研究保育で子どもの姿から内面について協議していったことが成果につながった。事実を正確に捉え、内面を理解することが保育の出発点であることが、4つの取り組みの中で繰り返し学べたことも成果であった。

課題としては、テーマである『主体的・対話的・深い学びを実現する振り返り』の“振り返り”の工夫に力を入れていたため、“主体的・対話的・深い学び”については、協議で深めていくことが難しかったことが挙げられる。

次年度以降、子どもの姿（事実）を正確に捉え、内面（育ちつつあること、経験していること）を推し量る力量を向上させるとともに、今回行った園内研の工夫をよりブラッシュアップさせ、主体的・対話的・深い学びにつながる実践へ結びつくようにしていきたい。

研究同人

玉瀬友美
中山美香
鎌倉正子
矢田崇洋
岡谷里香
森下英恵
青木佐樹
峯智子
中城亜紀
島村吏香
本田史子
川上綾音
梶原佑佳

研究協力者

永野秀美
宮藤良夫
大野千絵

主体的・対話的で深い学びを実現する
保育の振り返りと実践のあり方（1年次）

令和元年度

発行日 令和2年2月6日

編集・発行 高知大学教育学部附属幼稚園

郵便番号780-0915 高知市小津町10-26

TEL 088-822-6417 FAX 088-822-6412

ホームページ <http://www.kochi-u.ac.jp/kinder/>